

任国あんなこと!こんなこと!

☆次回から特集テーマを決めて掲載します。☆
マニアの投稿大歓迎!!

フィリピン南島・ミンダナオの先住民ティボリ族 (森田 奈美 会員)
ミンダナオ南部にあるジェネラルサントス市の空港が私の第二のふるさと・南コタバト州への玄関口。私は96年9月からフィリピンと日本を行き来する生活に入った。95年8月に初めてミンダナオを訪れ、山奥に暮らす先住民ティボリ族の生活、自然と共存している姿に感動し、「この大自然の中で暮らしたら、きっと心根が良くなるに違いない…」と勘違いしてしまったのがきっかけだった。

先住民と他のフィリピン人との違いはなんだろう? 普段は服装もTシャツやジーンズなどフィリピン人と同じようなものを着ているし、教育を受けていればフィリピン語や英語もしゃべるから黙っていればわからないことも多い。伝統的な生活もなくなりつつある。

そんな中で、先住民ならではの慣習がいくつか思い浮かぶ。私がとつてもびっくりした話は村裁判だ。罪を犯したといわれる人が、本当にやったのかどうか、ダトゥ始め村人の前で行なわれる儀式とは、煮えたぎったお湯の中にこぼし大の石を入れ、その人が素手でその石をやけどせずに取り出すことが出来たら『無罪』、やけどしたら『有罪』! 私が「みんな『有罪』になるに決まっている!」と言ったら、その話をしてくれていた人たちが口々に「いや、私は〇〇さんがやけどしなかったのを見た」とか、「今まで何人も『無罪』になったのを知っている」とか言い出すのだった…。

残念ながら、私はまだその現場を見ていない… いつか見られるときが来るのか、楽しみだ。

「ジャズの音はクリスタルシティー・ニューオーリンズから」(その1)

(高濱 清 会員)

私が勤務したニューオーリンズの総領事館は、今回、ハリケーン・カトリーナにより避難した被害者等の避難場所となった米国フットボールの会場スーパードームの近くの高層ビルの20階にあり、その事務所からはかつて奴隷制とプランテーションで象徴される南部の歴史を眺めてきたミシシッピー川が悠々と流れているのが一望できます。この町は行政区画上はルイジアナ州内のひとつの町ですが、人口、規模共に州都バトラーージュ(フランス語で赤い口紅の意)より大きく、観光とジャズで世界的に名が知れています。

ルイジアナ州はかつてフランス、スペインの支配下にあった歴史的背景を持っていることから、他州にはない伝統と文化を持っています。ニューオーリンズの名前は領土国であったフランスのオルレアン公から、ルイジアナは太陽王といわれたルイ14世の名前から来たと言われていますし、通りの名前や町の呼称にはフランス名が多くつけられています。自由に能力を活かし芸術を楽しむとする大道芸人、画家、音楽家が集まる場所、そして19世紀的な雰囲気と漂わせたスペイン統治時代の建物が多い場所「フレンチクォーター」等に象徴されます。この地区は昼間から観光馬車の蹄の音が聞こえ、夕方になると多くの老若男女が集まって、飲み、踊り、おしゃべりをして人生を楽しんでいる姿が見られます。特に世界的に有名なマルティン・グラ祭(カソリック教徒がイースター前に行う断食に先立ち思い切り騒ごうという謝肉祭の最後の日に行われる祭り)があるときには、地区内の多くの建物の瀟洒なベランダあるいは道路には多くの仮装した男女が集まり、徹底してドンちゃん騒ぎをします。また路地から路地にはこの祭りを見ようと世界中から集まった観光客でいっぱいになります。更に、このお祭りの期間、町の大道りには仮装した有名人が乗った山車が出て、彼等が集まった人々めがけて投げつけるビーズのネックレスやダブルーンというコインを人々が取り合う眺めは壮観で、沢山のビーズやコインを取った人には幸運が来るといわれています。(続く)

テレレの思い出

(山田 敏夫 会員)

私が南米パラグアイ国の首都アスンシオンにあるINTN(国立技術標準院)で、計量制度の確立(質量分野の検定検査技術向上プロジェクト)に従事していたときの懐かしい思い出は「テレレ」だろうか。むろん南米だから、アサード(焼肉)パーティや仕事を止めざるを得ないサッカーの熱狂、パラグアイならではの「アルパ」、官公庁や社会全般の杜撰・怠慢・アンフェアなど色々あったが。

パラグアイの「テレレ」とはマテ茶の葉をコップに入れて水を注ぎ、表面に細孔のある金属製のキセル状のストロー(ボンビージャ)で飲むものをいう。2リットル入り位の水筒と「テレレ」のセットを携行して出勤し仕事の合間にチュルチュル飲む。カウンターパートはむろんINTN院長はじめ職員のみ携物。会議や木陰の雑談では大抵誰かがホストになって回し飲みをする。一人が飲んだらコップをホストに戻し、ホストはさらに水を継ぎ足して次の人に勧め、断らない限り延々と続く。「テレレ」の味は、ホストごとに葉草や甘味を加えたりして微妙に異なる。私もその仲間だったが、恒常的な暑さのぎに適應する意識弛緩・沈静効用は抜群のドリンクと言えよう。そのため会議では、主題と得べき結論を再三指摘して時間を切って制御しないと、カウンターパートの雄弁と「テレレ」効果によって散漫なものに陥りがちであった。

(マテ茶は南米山地に自生のジェルバという常緑低木の葉を乾燥・粉碎したものを、日本の緑茶等と同じく通常は湯で煎じて南米で広範に飲む。カフェインを含み特有の芳香と苦味がある。)

ウズベキスタンで定着してきたビジネスコース

(福田 信一郎 会員)

市場経済を担う人材を育成するために2000年10月設立されたJICAウズベキスタン日本人材開発センター(UJC)は、その目玉であるビジネスコース、中でも若きビジネスマンや起業家予備軍を対象にした5ヶ月間の集中型MBAコースではすでに6期の卒業生合計約300人を世に送り出した。

通常のMBAコースで2年間も時間をかけられない、早く知識を吸収して稼ぎたいという切実な要望に応えるために設けられたこのコースには、初めから向学心に燃え、目的意識を持った若者が多数応募し選考はなかなか大変であった。選考から成績のランクまですべて公平・透明性を保ち、授業の質を維持向上する運営姿勢は、コネ社会の当国では異彩を放ち、当卒業生はコネなく競争で勝ち抜いてきた精鋭として高く評価されている。

マスコミでも度々取り上げられ、「勉強するならUJCへ」という合言葉言葉がはやったほどである。まさに当地の一流大学のMBAコースを凌駕してしまった感がある。

当国では経済が不振であるゆえに良い仕事にありつきたいと自分で企業を起こした若者が多く、彼らは良く勉強する。名古屋大学大学院法学コースの学生が当コースを見学し、あまりの熱心さに圧倒された感想を漏らした。

ウズベキスタン東部で5月に起きたアンディジャン事件は、国内の長引く経済不振が背景の一つにある。ウズベキスタン政府は国内の体制を脅かすような事件の再発防止のため、経済開発に真剣に取り組み始めたといわれる。特に欧米諸国や国際機関から総スカンをくいと国際的な信用が低下している今、当国では欧米との融和を図るためその架け橋として日本を頼りにしており、特に人材育成に実績を挙げているUJCの存在を意識し始めたといわれ、UJCの存在の意義は大きい。

JICA帰国専門家連絡会かながわ会報 第5号

発行 2005年10月

発行者 JICA帰国専門家連絡会かながわ(JECK)

事務局 谷保 茂樹(e-mail:Staniho@aol.com)

横浜市青葉区青葉台1-3-9

株式会社ティーエーネットワークイング内

編集委員会 佐藤満寿哉(編集責任)

中之蘭賢治(代表幹事)、鈴木千明、物部宏之、谷保茂樹

印刷 横浜リテラ(URL: <http://www.yokohamalitera.com/>)

(e-mail: info@yokohamalitera.co.jp)

横浜市戸塚区上矢部町2039-2